

着物を部屋中に広げる…

⇒発想の転換や割り切りが必要です

【 認知症の人の状態 】

とよさと病院 認知症疾患医療センター

2022.6作成

認知症の症状が進むと、もの忘れが多くなります。すると、**大事にしていたものが本当にあるか、絶えず心配**になる人がいます。自分の目に確認できないものはないも同然なので、“私の大事な着物はどこかしら？”と思った瞬間に、目の前にないので心配になって探しはじめます。そして、タンスから一枚一枚取り出して、目の前に広げてみることで、やっと安心できるのです。

そうしたそばから家族にさっさと片づけられてしまうと、本人は目で確認できず、不安なのでまた広げて確かめます。この繰り返しの、家族はイライラするかもしれませんが、そのままにしておいても差し支えないことは**そのままにしておく、という割り切り**が、周囲の人には必要です。

また、こうしたことは着物に限らず、本人の好きなものや大切にしているコレクションでも起こり得ることでしょう。本人の物だったり、多少汚れたり壊れたりしても大した問題でなければ、**同じ症状がいつまでも続くことはない**ので、“**散らかっていても病気になるわけではない**”というように、**発想の転換**も必要です。

【 対応方法 】

参考文献：杉山孝博, 認知症の9大法則50症状と対応策, 法研, 2013, P132-133

- ①部屋中に着物を広げているのを見つけたら、「まあきれい！衣装持ちなのね」と褒めると、本人の気持ちが落ち着きます。
- ②時間に余裕があるときは、認知症の人が広げた着物を**一緒に畳みながら**、着物にまつわる思い出を語ってもらいましょう。気持ちも穏やかになり、次回からこちらの言うことを聞いてくれる場合もあります。
- ③汚されたくない着物や、将来自分がもらいたい着物があるのなら、それだけは**別の場所にしまっ**ておいて、あとは本人の気の済むまでそのままにしておきましょう。同じ**症状は長期に続かない**ので、割り切りは大切です。

リビングなど広げられては困る場所の場合…



隣の部屋のほうが明るくて、気持ちいいですね

和室のほうが暖かいですよあっちで広げませんか

ケアのコツ…「否定しない」ではなく、「有を与える」

本人が言うことを「否定してはいけません」とよくいわれます。しかし、「あなた、わたしのお金盗ったでしょ!」と言われたら否定しないわけにもいきません。

「否定しない」までも、「本人の考えを訂正する」というコミュニケーションは避けられないというのが、多くの介護者の実感ではないでしょうか。

「有（う）を与える」とは、本人の話（発言）を、ただありのまま受け取るとをいいます。たとえば、「家に帰ります」という言葉に、あなたが賛成であろうと、反対であろうと、家に帰りたいと言っている事実が変わりはありません。

「その人が言っている（している）事実を、事実として認めるだけ」で、本人にとっては「自分の話（気持ち）を聞いてもらえた」「自分を尊重してくれている」という感覚が芽生えます。



参考文献：ペhos, “理由を探る” 認知症ケア, 株式会社メディカル・パブリケーションズ, 2014, P186-188

2022.6作成